

地球第二十七卷第一號

昭和十二年一月一日

昭和十二年を迎へて

小川 琢 治

我が「地球」は關東大震災の翌春第一卷を發刊して以來、早くも春秋を累ねること十四回にして地理學及び地質學の諸種の問題に對する研究が本誌創刊後に面目を改め、雁行する數種の發表機關が各特色を發揮しつゝある盛況を見るに至つた。發刊の當初を顧みれば、東京に於ける我が姉妹雜誌が一時全く印刷不能の状態に陥り、學界に一抹不安の感を禁じ得なかつたのであるから、潑刺たる今日の氣運を開くに、本誌の貢獻する所のあつたのを我々は欣快とするものである。

それより更に十年にして、關西地方も亦た風水の災厄の爲めに前代未聞の大損害を被り、從來の經驗を基礎とした大小の人工的建設の或るものは殆んど無力なるかの觀をすら呈したのであつた。首都の復興その緒に著いた次に、國際的非常時の近づく際に、再び此の自然力の狂暴なる試練に遭つたのであるから、我が國民の一時の視聽が當面の善後策に專注されるだけで、將來に反覆さるべき慘禍の防止及び結果の輕減に必要な對策の講究を怠る可らざるは絮説するまでもない。

上述兩地變の性質たるや、決して豫想し得ない偶發の事變に非ずして、規模に大小の差等はあつても、間斷なく反覆されるものであつて、從つて將來また發動するのを避けられない筈のものである。然るに咽元を過ぐれば熱さを忘れる俗諺に漏れず、或る大都市人がオリンピックの時に來る遊覽外人に不體裁だから或る種の建設が必要だといふ風の論法で、百年の長計に非ざる種類の濫費を強要するのを耳にする。此の種の言論中には必しも善意を缺くでなく、己が主張の促進に此の如き機會を利用したまでのものがあらうと考へられるが、その不眞面目な態度は飽くまで唾棄さるべきものである。我々自然科學の學徒の立場は此の如き浮動する社會の思潮から獨立して、事相物相の根本的な考究鑽研に従事するに在る。

本誌の印刷中に我々の視聽を驚かした東亞大陸の一二・一二事件は清室倒壞以來二十數年に互る内亂の一エピソードとして之を見るを得ざる重大性を認めねばならぬ。十八世末の佛國革命の波動を感じた英國と同じ立場に在る我が帝國は對岸の火災視し能はぬから、東亞大陸の東邊まで蹂躪された蒙古の襲來を喰ひ止めた時と同じ大決心を要するに至るやを逆睹し難い。我が地球學團の同人中に現に科學者として報國の赤誠を懷抱し、櫛風沐雨の勞苦を甘んじて、踏査探檢に従事しつゝある人士のあるのは大に誇り得る所と信じ、現下の狀態に於いて、その結果を公表し得ないが、大陸の現狀を諦視すれば、本年以後倍々その奮勵を新にせねばならぬと豫想され、此等の人士の健闘を禱りつゝ新春を迎へたい。